

平成30年度 新規研究課題の概要

No.	課 題 名	実施機関	期待される成果
1	【プロジェクト研究1】 <産地間競争に打ち勝つための新たな品目・価値の創造> P1-1 新しい食べ方で消費拡大につながる伝統野菜の復活	農林センター (亀岡) 生物資源研究センター	京の伝統野菜のうち「かんたん調理野菜シリーズ」3品目の栽培面積・販売金額が増加する。
	(1)新規品目の利用適性評価と品種選抜		若採りに向くナス、花菜に向くカブ・ツケナ類の選抜
	(2)新規品目の栽培法の確立		(1)で選抜した品種・系統を対象に、省力化や施肥等の栽培法を確立
	(3)紫、赤色等の小カブ品種育成		安定した着色、根が美しく安定した球形で高糖度の小カブ品種を育成
P1-2 美味しく低コストな新「京地どり」の創出	畜産センター	高品質で生産性に優れた京地どり飼養管理方法の確立により、生産羽数の増羽と市場競争力の強化 生産費1,300～1,600円/羽 飼育回転数2回/年→3回/年 生産羽数16,000羽/年→30,000羽/年 に向上	
P1-3 アカガレイの付加価値向上技術の開発(拡充) (うち、長期鮮度保持技術の開発)	海洋センター	<ul style="list-style-type: none"> ・活魚の水揚げ時生存率を5割から8割に向上 ・水揚げ後の陸上水槽における保管日数を現在の2～3日から 一週間に延長することで高品質な鮮魚を安定的に供給 ・特殊な急速冷凍機器を用いて高品質を維持することで、操業自粛期間である夏季を中心に供給 	
2	【プロジェクト研究2】 <宇治茶の機能性の解明と伝統技術に基づく新技術の開発による宇治茶ブランドの継承発展>	茶業研究所	P2-1 手摘みなどによる品質の高い製品の成分の特徴や機能性評価といった付加価値情報の活用により、消費者へのPR効果が向上し、宇治茶の消費拡大につながる(茶販売量が5-10%向上)。
	P2-2 宇治茶の伝統技術の利点を活かした省力・効率化技術を開発し、手摘み覆い下茶生産の維持・拡大を図る。		
3	アズキ機械化栽培での難防除雑草の総合防除体系の確立	農林センター (亀岡)	難防除雑草の分布拡大が防止され、アズキの収量増と除草の手間の減少により、粗収入が増加する。(36千円/10aの粗収入増を目指す)
4	強樹勢台木の接ぎ木による賀茂ナス果実の高品質・高付加価値化技術の確立	農林センター (亀岡)	生産性や外観品質の向上と、新たな機能性成分情報の発信により、収益が向上する。(380千円/10aの収益向上を目指す)
5	丹後地域における産地強化のための果樹複合経営の確立	丹後農業研究所	少ない経費でナシからブドウへの改植が促進され、経営所得が向上する。(ナシからブドウへの改植10aあたり500千円の所得向上を目指す)
6	花菜根こぶ病の精度の高い診断技術に基づく総合防除技術の開発	生物資源研究センター	開発した病害診断方法、対策技術を普及に利用し、収量減を回避(技術の現地普及により平成36年度に長岡京市の花菜産地14haで15,750千円の生産額増を目指す)
7	クロアワビ潜水漁業総合管理技術開発	海洋センター	放流・資源管理・漁場整備による総合管理技術の開発により以下の成果を目指す。 <ul style="list-style-type: none"> ・放流稚貝の生存率を20%→40%に向上 ・京都府のクロアワビ漁獲金額を約30,000千円から(直近5箇年平均)から45,000千円に向上
8	定置網漁業におけるクロマグロ小型魚の漁獲抑制に対応した改良網の開発		定置網漁業者の経営安定と資源保護の両立を実現するクロマグロ管理手法の開発 1経営体あたり最大23,000千円 [※] の機会損失を回避 ※改良網を活用せずクロマグロ小型魚の漁獲最盛期(1～2月)に休漁した場合の休漁損失額